優　秀　賞

“認める”ということ

尾張旭市立東中学校　3年　池　田　竜　之　介

僕が小学校高学年の頃、僕と同じクラスに絵がとても好きな男の子がいた。いつも男の子の描く絵は同じような絵ばかりで、その絵だけで絵を描くノートを一冊使い切ってしまうぐらいだった。

ある日、あまりにもその絵のことが気になってしまった僕は、思い切って男の子に聞いてみた。

「どうして同じような絵ばっかり描いているんだい？そんな絵ばっかり描いていて楽しいの？」

そう僕が言うと、男の子は笑顔でこう言った。

「ああ、これかい？僕はこの絵が大好きなんだ。だから僕は描いていて楽しいよ。」

僕には男の子の言うことが理解できなかった。それの何が楽しいんだ、と思った。

「そんなのつまらないよ。」

男の子の言ったことが気に食わなくて、つい何も考えずにそう言ってしまった。男の子は何も言い返してこなかった。僕はそれっきり、男の子とは話をしなかった。

結局、男の子は進級まで絵を描くのはやめなかった。それでも僕には男の子の言っていたことが理解できなかった。

一年が経って、僕は進級した。絵を描いていた子とクラスが別になってしまったということもあり、その子のことはもうすっかり忘れていた。

それから数週間が経ったある日、初めて同じクラスになった男の子から声をかけられた。

「やあ。初めまして。」

その男の子は自己紹介をしてくれた。僕も、それに返すように自己紹介をした。すると急に、

「好きなこととかある？」

と、その子に聞かれた。僕はゲームが好きだったので、

「ゲームかなあ。」

と、答えた。すると、男の子はがっかりしたように、

「ええ？ゲームはつまんないじゃん。運動の方が絶対楽しい。ほら、サッカーとか。」

と僕に言った。僕は男の子に、

「そうかなぁ？」

とだけ返して、男の子とわかれた。顔には出さなかったが、少し男の子の言っていたことにムッとした。好きなことなんだから、自分の勝手だろう、と思った。

学校が終わってからも、男の子の言っていたことが頭から離れなかった。しばらく考え込んでいると、ふと、絵を描いていた男の子に言った、ある言葉が頭をよぎった。

「そんなのつまらないよ。」

それを思い出して、僕は思った。自分だって、人の好きなことに口出ししていたではないか。人の自由を奪おうとしていたではないか、と。申し訳ない気持ちでいっぱいになった。あの男の子には謝らなくてはならない、そう思った僕は、次の日にすぐ謝ろうとおもった。

一日経った。すぐ男の子に謝ろうと男の子のいるクラスに向かった。しかし、教室には男の子はいなかった。それから毎日男の子に謝ろうとしたが、全く男の子とは会えなかった。その後、僕の転校が決まり、結局男の子には謝れずに学校を離れることになってしまった。他人の気持ちを考えていなかった自分を今でも悔やんでも悔やみきれない。

他人の意見を尊重すること、小さなことに思えるかもしれないが、とても大切なことだ。人によって出て来る意見は違う。つまり意見は自由なのだ。そんな意見を「これは違う。」と否定してしまうのは、人の自由を奪っているのと同じなのではないか。また、人が生まれながらにしてもっている『人権』にも、『思想・良心の自由』という権利がある。つまり、人の意見を尊重するということは、人権を尊重することにつながるということなのである。

日本には、約一億人ほどの人々が住んでいる。その一人一人が、他人の意見を尊重できるようになることを、僕は望んでいる。皆意考えは違っているかもしれない。でも、その考えの奥にある「想い」は、どれも、とても強い物であると、僕は思うから。